

第3回 キャリアデザインプロジェクト

グループ1 「Translational research の進め方」

大倉定之(リーダー)¹、大塚真衣²、仁藤智香子³、波間隆則⁴、春名孝洋⁵、盛佳旦⁶

- 1 日本医科大学微生物学・免疫学分野
- 2 日本医科大学解剖学・神経生物学分野
- 3 日本医科大学研究部共同研究施設
- 4 アンファー株式会社 研究開発本部
- 5 日本医科大学消化器外科
- 6 日本医科大学血液内科

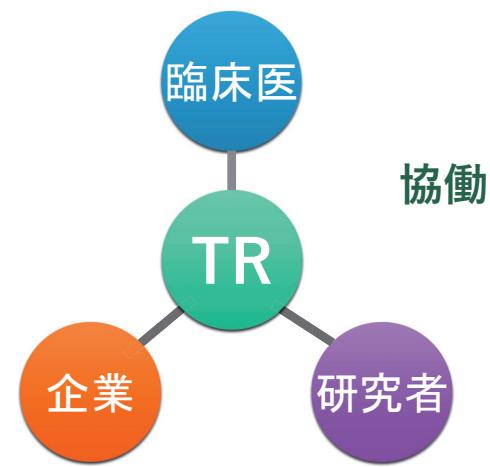
1. Translational researchとは



概要

1. Translational research (TR)とは（定義）
2. 日本のTRの課題
 - ・臨床医
 - ・基礎研究者
 - ・企業課題解決への糸口
3. 基礎研究から実用化へ～TR相談するために
4. まとめ～TRを進めるために

2. 日本のTRの課題



2. 日本のTRの課題

臨床医の課題



- 多忙な臨床業務 → 少ない研究時間
- 特許申請 → 学会、論文発表ができない
- (創薬TRの場合)
治療薬の処方は知っているが、
創薬について知る機会(臨床薬理学)が少ない

2. 日本のTRの課題

企業の課題



- 中小製薬企業やベンチャー企業は独自でシーズを研究する資源体力がない
- どこにシーズがあるかが分からぬ
- 特許がないと優先開発権、独占販売権を得られない
→アカデミアとのギャップ

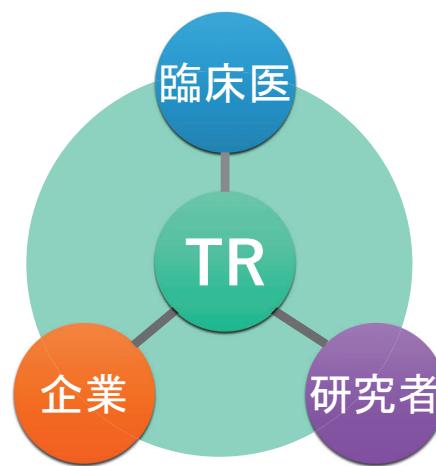
2. 日本のTRの課題

基礎医学研究者の課題



- 臨床に直結しないが、医学に必要な基礎研究
→ 論文以外で評価されにくい
- 論文が優先、特許回避の傾向
→ 企業との共同研究が困難
- 社会、臨床のニーズが見えていない

2. 日本のTRの課題



課題解消には

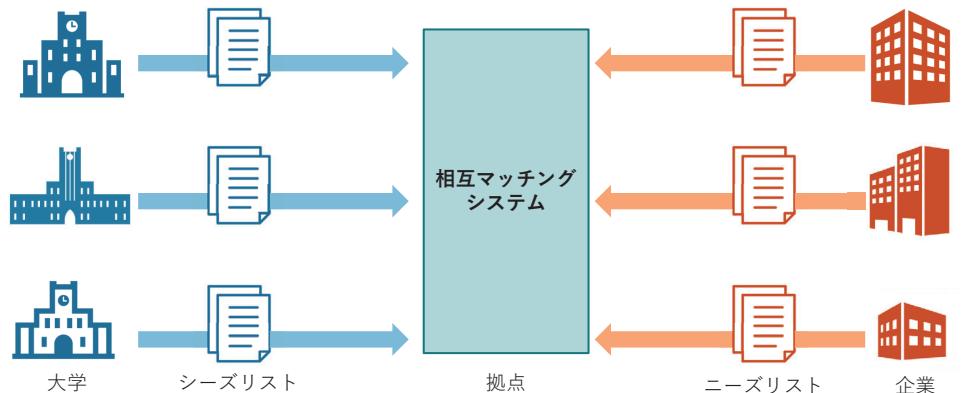
3者のマッチングが重要！

2. 課題解決への糸口

- ① 企業とのマッチングのチャンスがない！
- ② 学内にどんな研究シーズが眠っているかわからない！
- ③ 基礎研究者が社会や臨床のニーズに関心が薄い！

2. 課題解決への糸口

① シーズリスト作成によるマッチングチャンスの創出



2. 課題解決への糸口

- ① 企業とのマッチングのチャンスがない！
→ シーズリスト作成によるマッチングチャンスの創出
- ② 学内にどんな研究シーズが眠っているかわからない！
- ③ 基礎研究者が社会や臨床のニーズに関心が薄い！

2. 課題解決への糸口

- ① 企業とのマッチングのチャンスがない！
- ② 学内にどんな研究シーズが眠っているかわからない！
→ ポテンシャルをもつ基礎研究を見出す
- ③ 基礎研究者が社会や臨床のニーズに関心が薄い！

2. 課題解決への糸口

② ポテンシャルをもつ基礎研究を見出す

TRへの移行を前提とした
研究計画策定の推奨

- 基礎研究をTRに進展させる
サポート

学内の基礎研究内容把握

- 研究者単位で研究内容を把握
(個別Research Planなど)
- 研究の方向性、進捗などに
関してadvisor設置など

基礎医学研究から上がるシーズが増えれば、
臨床医学と連携した研究活性化が期待される

2. 課題解決への糸口

③ 基礎研究者のTRへの理解を推進

まずは、TRの啓発

- 定期的セミナー開催

研究統括センター
幸せキャリア支援センター
など

TRに手をのばすには、
なにが必要か…?

- 大型研究費取得 (AMED等)
- 特許取得
特許ライセンス料等
→ 繼続的研究費
特許 (Conceptual patent)
申請のPatent map
論文文化のタイミング ...etc.
(AMED:日本医療研究開発機構)

2. 課題解決への糸口

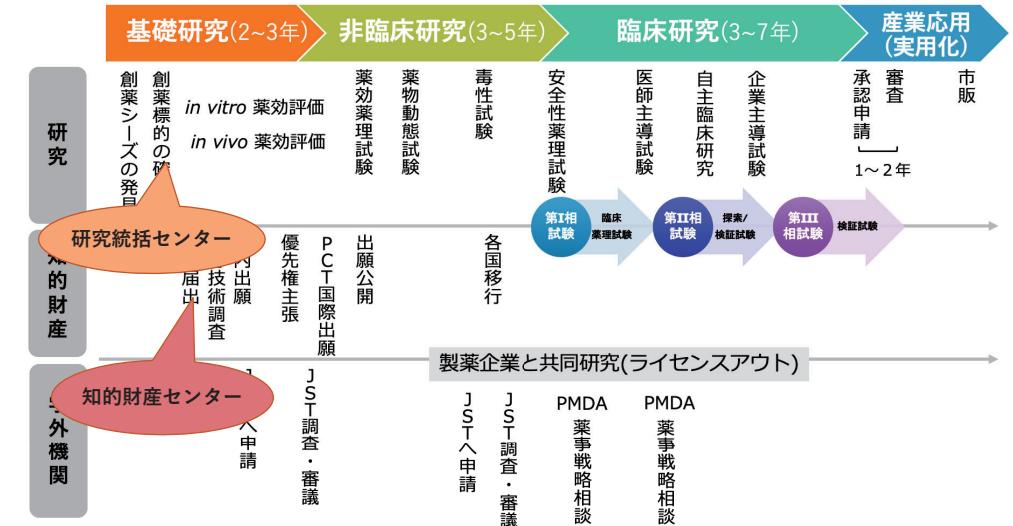
① 企業とのマッチングのチャンスがない！

② 学内にどんな研究シーズが眠っているかわからない！

③ 基礎研究者が社会や臨床のニーズに関心が薄い！

→ 基礎研究者のTRへの理解を推進

3. 基礎研究から実用化へ～TR相談するために



3. 基礎研究から実用化へ～TR相談するために

協力・支援を求める機関

■ 学外

- 橋渡し研究支援機関
文科省の定めた11機関:東大, 筑波大, 慶應大等, JST等

- 企業 製薬、医工関連、ベンチャー

- AMED 公的資金

- 弁理士

…etc.

■ 学内

- **研究統括センター**

- **知的財産推進センター**

3. 基礎研究から実用化へ～TR相談するために

臨床研究が見えてきたら…

Target Product Profile (TPP) の作成

- ・シーズの性質、開発戦略を整理
- ・非臨床・臨床研究の指針となる

- | | |
|--|---|
| 1. 製品の概要 | 7. 投与計画：経路・目標とする用法用量 |
| 2. 医療状況に照らしたNeeds/技術革新 | 8. Marketの状況：競合/参入障壁、予想される薬価 |
| 3. Keyとなる項目 | 9. 市場性・収益性：売上げ予測
市場規模、投資金額規模、回収期間、原価予測 |
| 4. 有効性：有効性のベンチマーク
Go/No goの判断基準 | 10. 特許/知財
FTO/特許満了までの期間 |
| 5. 安全性：安全性のベンチマーク
Go/No goの判断基準 | 11. 開発に想定される工程の複雑さ/コスト/期間 |
| 6. 製剤：規格・安定性や扱いやすさ（保管条件）
製造/サプライヤ/必要なインフラ | 12. 付加価値、競合に対する優位性 |

3. 基礎研究から実用化へ～TR相談するために

研究統括センターに相談する前に…

1. 出口戦略を明確にする

- ・Research question
- ・どんなニーズに応えたいのか
(社会的、臨床的な意義は何か?)
- ・アカデミアと企業のギャップの理解

2. 好意的、否定的な先行研究の調査

3. これらに基づいて研究のConcept sheetを作成

4. まとめ～TRを進めるために

■ シーズ研究の早期発見・支援

■ 社会・企業のニーズ ⇄ 学内シーズ・研究資源をつなげるマッチングシステムの開発・制度化

■ 臨床・基礎医学研究者におけるTR研究への啓発・意識醸成

■ 学内外支援機関との連携

第3回女性・若手キャリアデザインプロジェクト

研究と臨床の両立

森嶋素子¹ 大内望² 福泉彩³ 大矢智之⁴
門田寛子⁵ 神澤慎哉⁶

¹日本医科大学 心臓血管外科, ²日本医科大学 女性診療科産科,

³日本医科大学 呼吸器内科, ⁴日本医科大学 精神神経科,

⁵日本医科大学 リウマチ膠原病内科, ⁶アンファー株式会社 研究開発本部

目的

「研究と臨床の両立」を実現するにあたり、

医師が現在直面している問題点を抽出し、解決方法を模索する。

背景

- 臨床に携わる医師が研究者として臨床での疑問を追求する、
というのは理想の医師像である



- 実際に臨床的な研鑽と研究生活を両立することは難しい

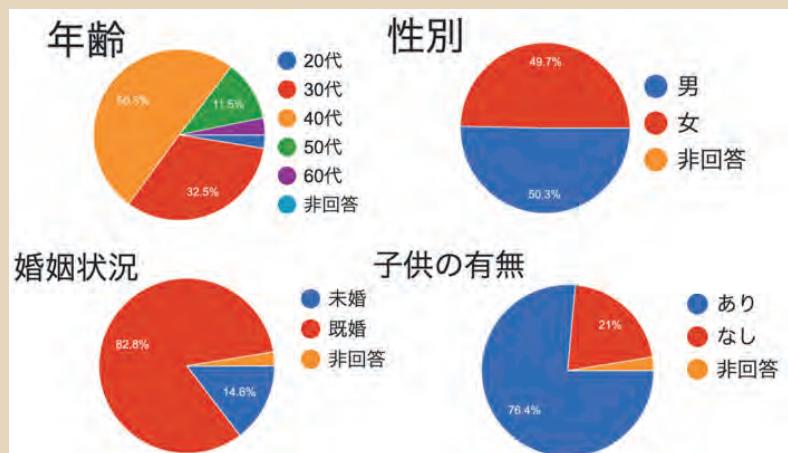


対象および方法

- 発表者らが、臨床経験を有する医師(学内、学外の同窓生、知人、日本医科大学に在籍する医師)にメールでアンケート(googleフォーム形式)を依頼
- 回答が得られた157名を対象とした。

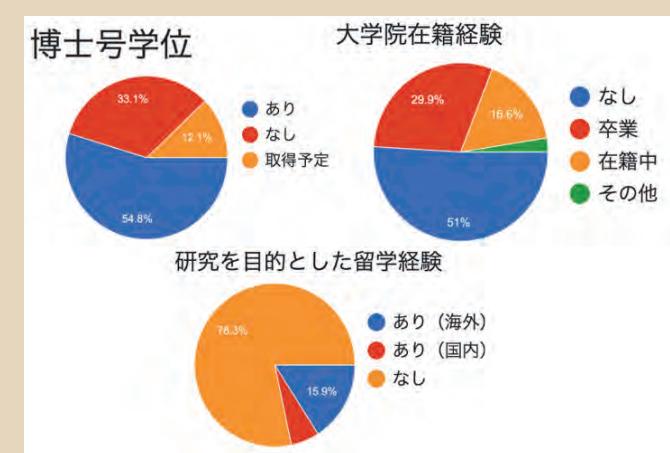
結果

アンケート回答者プロフィール



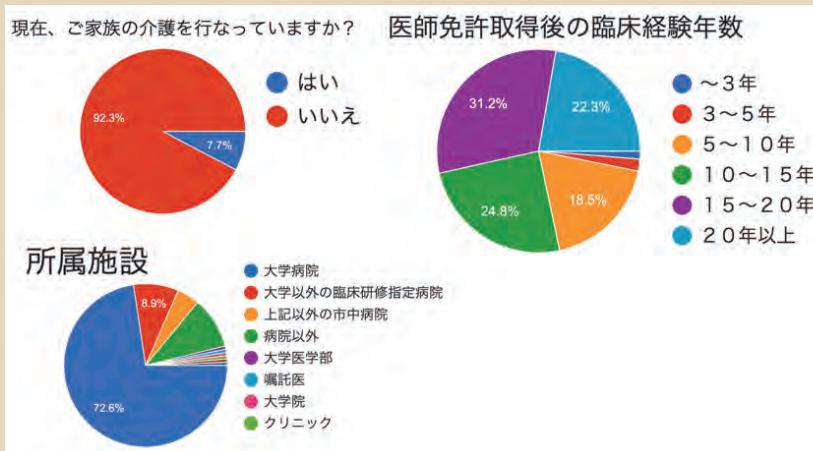
結果

アンケート回答者プロフィール



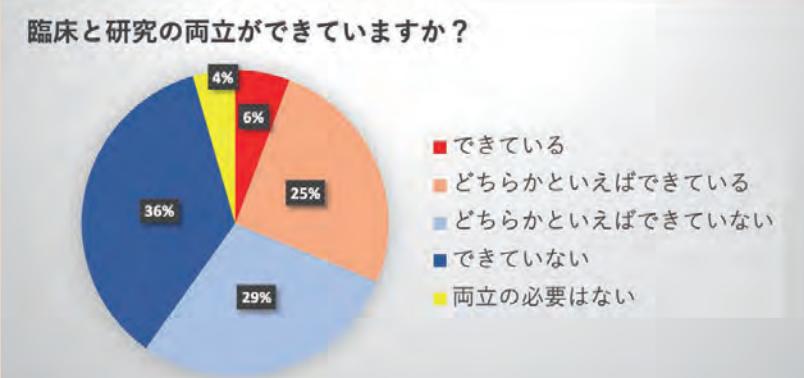
結果

アンケート回答者プロフィール



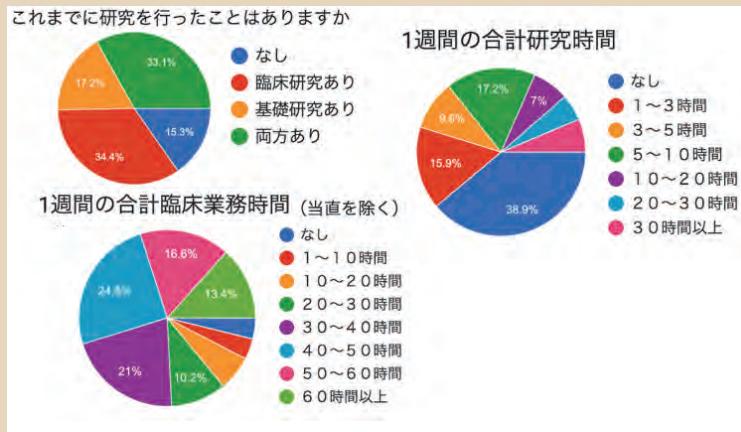
結果

研究と臨床の両立



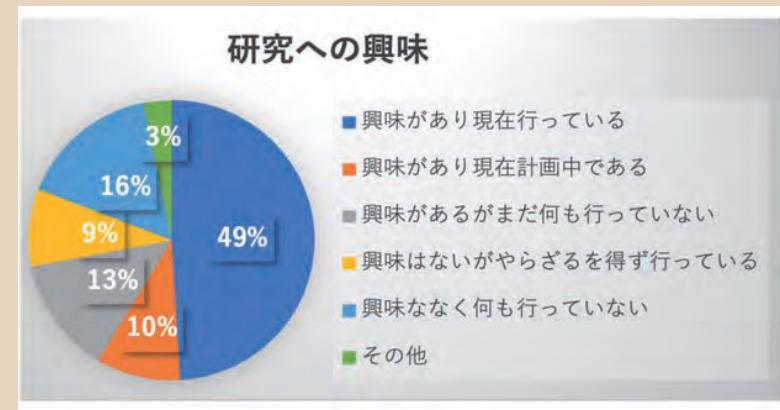
結果

臨床業務時間と研究時間



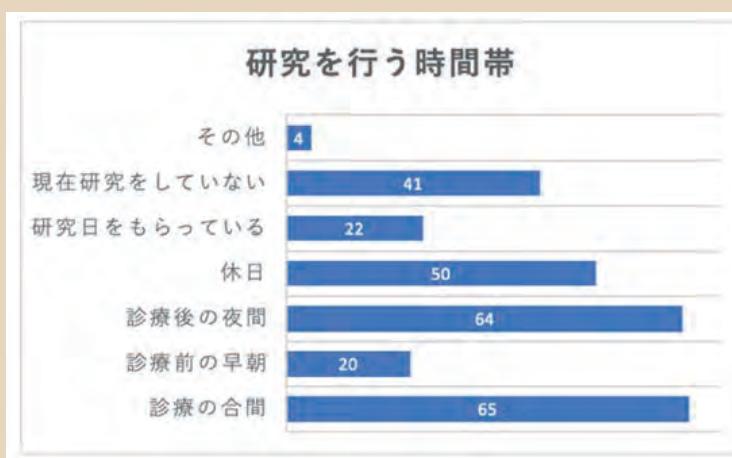
結果

研究への興味



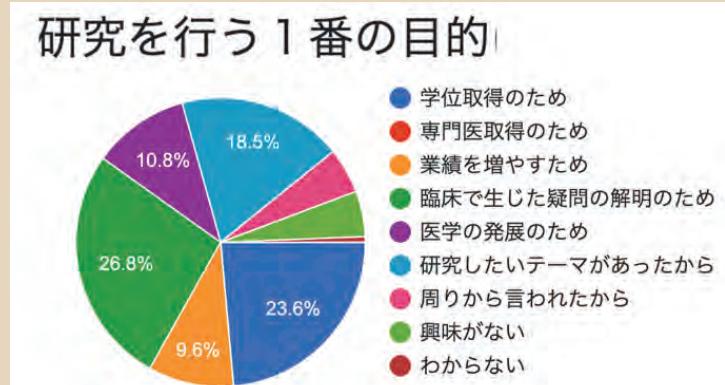
結果

研究時間



結果

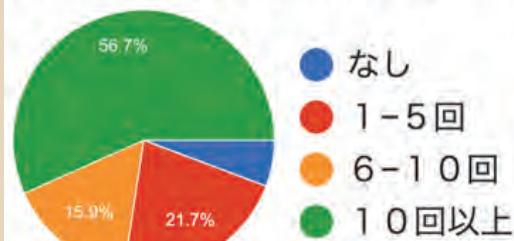
研究の目的



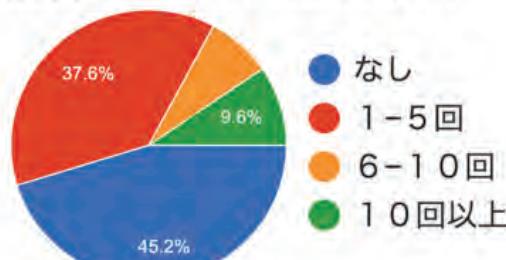
結果

学会発表

国内 学会発表（査読あり）



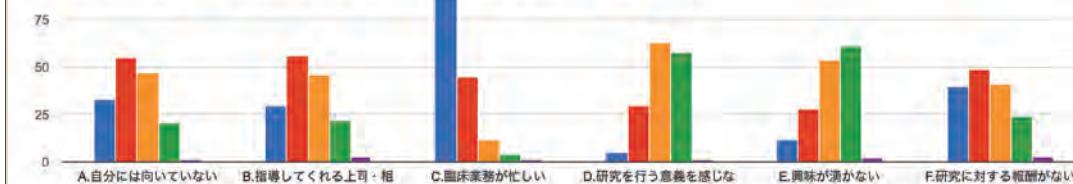
海外 学会発表（査読あり）



結果

問題点

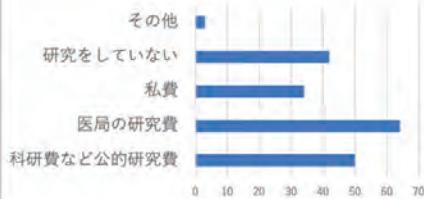
100 大いに感じる まあまあ感じる それほど感じない 全く感じない わからない



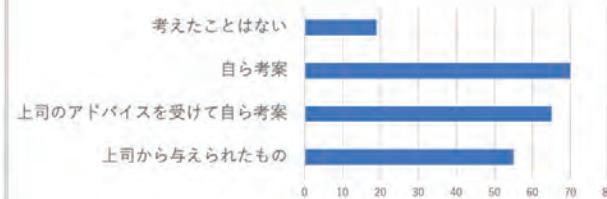
結果

研究費と研究テーマ

研究費の工面



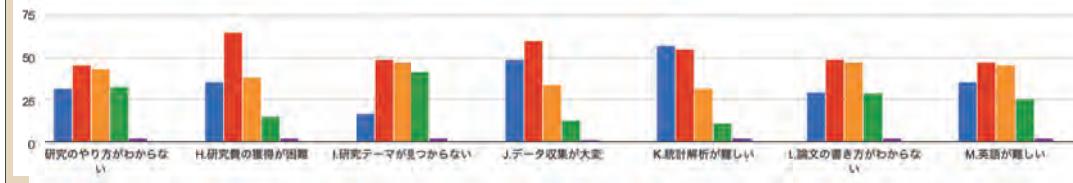
研究テーマ



結果

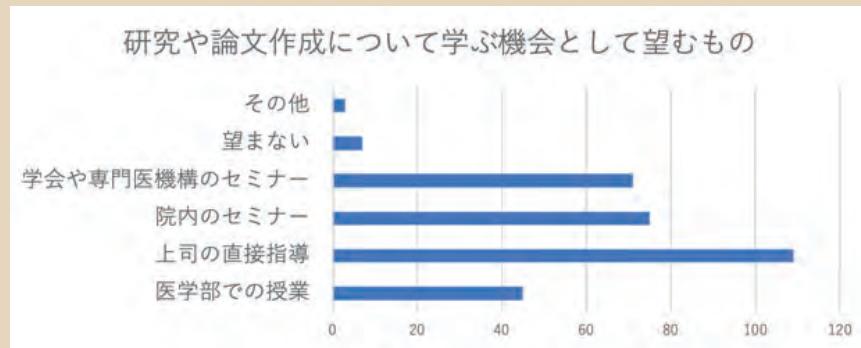
問題点

100 大いに感じる まあまあ感じる それほど感じない 全く感じない わからない



結果

学ぶ機会として望むもの



考察

「研究と臨床が両立できていますか」の問い合わせに対し

「できている」または「どちらかといえばできている」

→ 「両立できている」(49名)

「できていない」または「どちらかといえばできていない」

→ 「両立できていない」(101名)

結果

自由意見のまとめ

時間面
・研究日がほしい
・研究時間の公的割り当てが必要
・とくに、基礎研究はまとまった時間が必要
・臨床のウェイトが多くすぎる
・臨床が忙しそう
・研究の時間も労働時間として見なしてほしい

金銭面
・低報酬
・大学の勤務医は研究・教員として報酬が支払われているはず。臨床はボランティア
・低賃金のため、研究日にバイトに行かざるを得ない
・研究費がない
・学会関連費用などの補助がほしい

心理面

- ・研究に対する周囲、職場、大学病院の理解がない
- ・研究する人材が病院に大切にされていない
- ・やる気が出ない
- ・指導者のパワハラ・アカハラがある
- ・基礎研究に対する理解がない
- ・研究が評価、待遇、労働時間、給与に反映されていない

研究方法

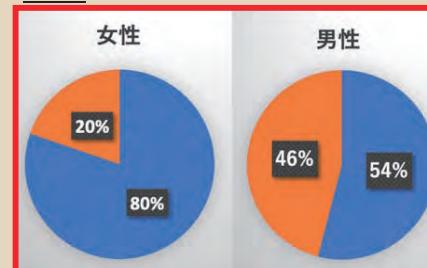
- ・統計や研究の相談会を開いてほしい
- ・医療統計学講座を開いてほしい
- ・基礎研究室とのコラボ、協力体制の充実させてほしい
- ・自分の興味のある分野の指導者を探す必要性がある
- ・研究の指導医が欲しい

その他

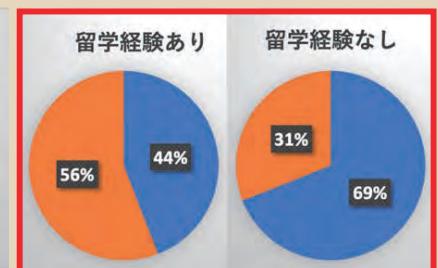
- ・大学病院の業務範囲が不明確
- ・実験助手、リサーチナースの導入をしてほしい
- ・臨床業務のタスクシフトと事務作業の低減が必要
- ・研究をサポートする人材 (writerなど) がほしい
- ・研究以外の診療業務は別途雇用契約、報酬がほしい

考察

性別

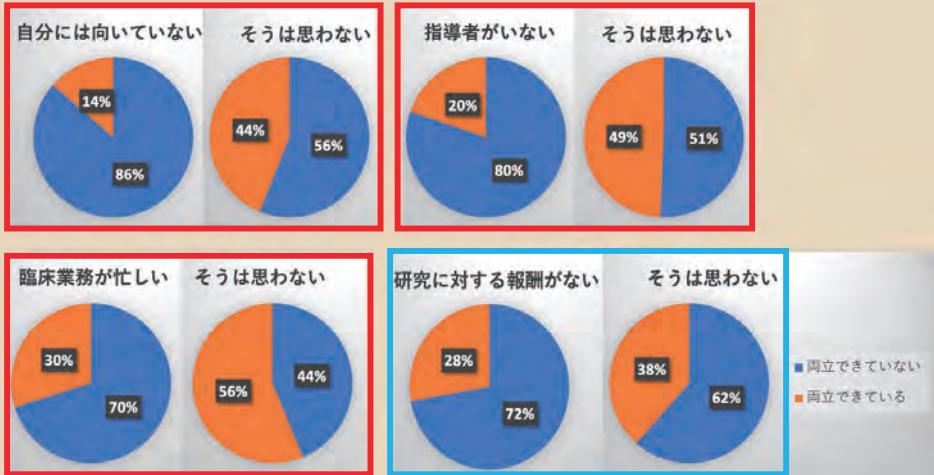


留学経験



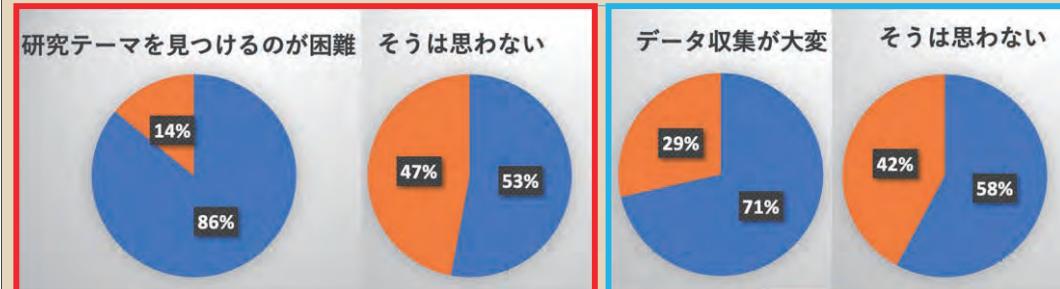
考察

問題点



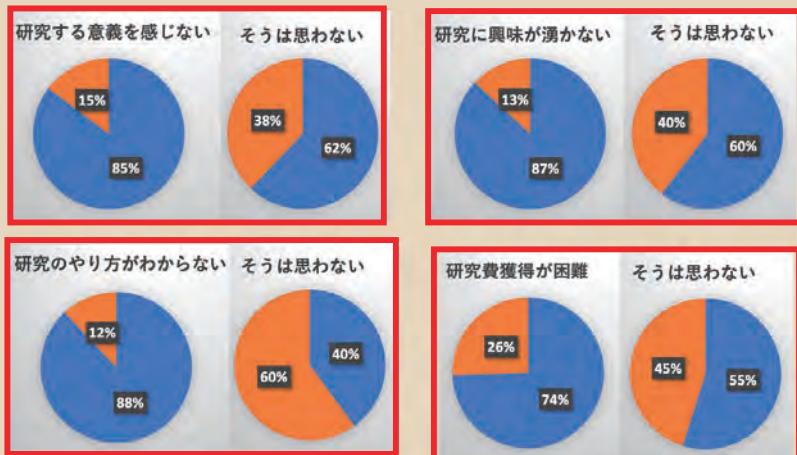
考察

問題点



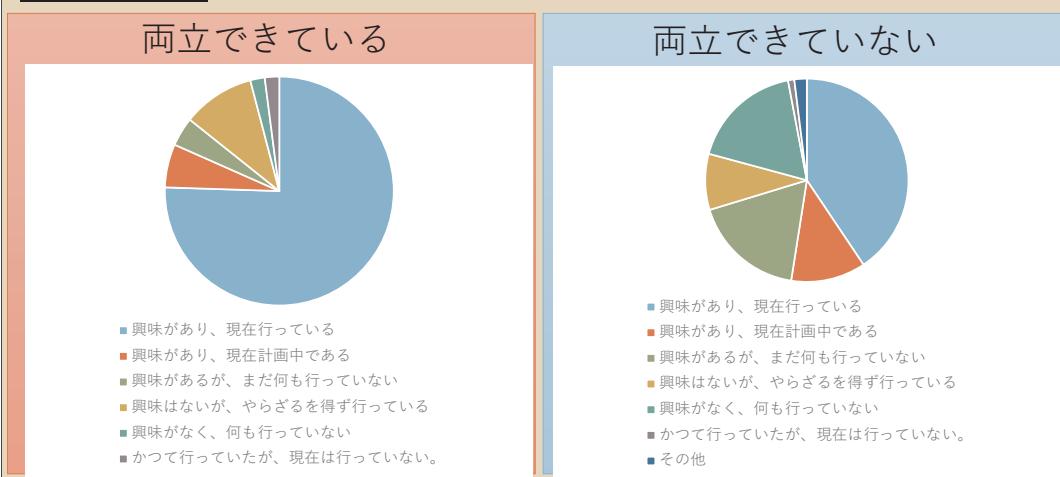
考察

問題点



考察

研究への興味



考察

- 両立できていないと回答した医師

- ・研究に興味はある
 - ・臨床業務や家事育児が多忙
 - ・苦手意識や研究費獲得の問題
 - ・指導を受けられる環境がない

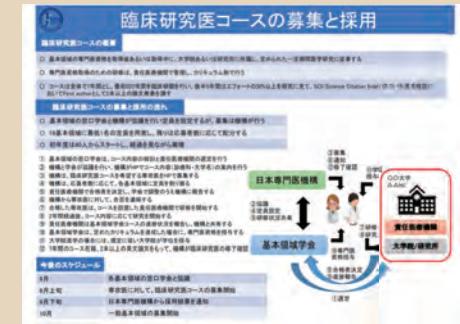


- 両立できていると回答した医師

- ・時間や金銭面でのやりくりに苦労しながらなんとか両立している
 - ・研究を行っていない医師と同等の臨床業務を求められることが負担となっている

考察

- 2021年度より日本専門医機構が「臨床研究医コース」を創設
 - 2年間の専門研修の後、5年間、研究と臨床の双方に従事し、計7年間で専門医資格に加えて学位の取得を目指すコース
 - 今後の取り組みが期待される。



一般社団法人 日本専門医機構HP
<https://jmsb.or.jp/senkoi/#an14>

考察

- 研究機関としての役割も担う大学病院においては、研究を臨床と同様の重要な業務と位置づけた環境整備が必須
⇒ 現状では不十分

多かった要望

- 研究に当てる時間の確保
 - 研究補助員の充実化
 - 研究資金の確保
 - 臨床での医師業務の軽減
 - 指導者とのマッチング
 - 統計、研究についての相談ができる場



結語

- 研究と臨床が「両立できていない」と回答した医師の半数以上が研究を行うことに意欲があるものの、時間、金銭面、環境面で研究継続に困難さを感じていた
 - 「両立できている」と回答した医師は、時間や金銭面で工夫をし、なんとか両立をしているが、周囲の研究に対する理解の乏しさに困難さを感じていた

謝辞

アンケートにご協力いただいた**157**名の先生方、ありがとうございました。



研究の効率化と生産性の向上

グループ3

弓削 進弥（リーダー）（日本医科大学 先端研 病態解析学/分子細胞構造学）
遠田 悅子（日本医科大学 解析人体病理学）
戸山 友香（日本医科大学 泌尿器科）
黄 美貴（日本獣医生命科学大学 獣医学 獣医解剖学）
加藤 順也（日本獣医生命科学大学 獣医学 野生動物学）
奈良井 朝子（日本獣医生命科学大学 応用生命科学 食品科学 農産食品学）

なぜ研究の効率化と生産性の向上？

- ・研究者の業務 — 研究時間の確保、業務のバランスに日々苦心研究
研究以外の仕事(教育、運営、事務、社会貢献)
臨床(医師研究者)
管理運営(上の職位) } 負担上昇
- ・研究者の昨今の生活 — 仕事も家庭も男女平等に従事
仕事
家事
育児
介護 } 活動増加

研究に費やせる時間と体力と精神力には限りがあるが、
世界レベルの研究をしたい！（日医大・日獣医生命大研究者の声）

目的

研究の効率と生産性の向上のために
課題を探り出し、問題点を明らかにして、
改善策を提案する

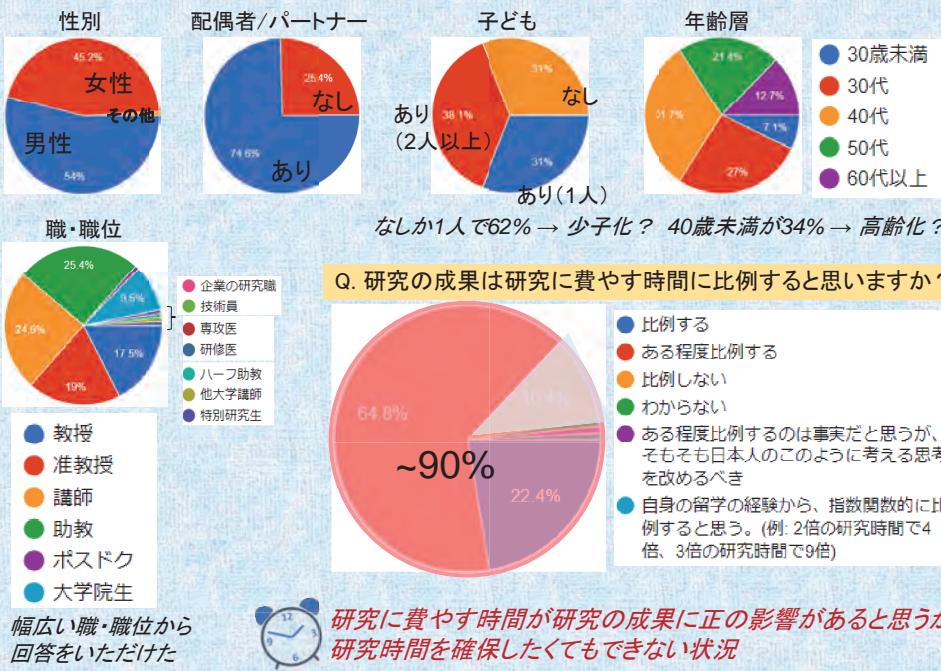
方 法

- ① グループ3のメンバーで議論
- ② アンケートで研究者の意識を調査(日医大・日獣医生命大)
- ③ グループ3のメンバーの意見とアンケートで回答いただいた意見を
合わせて、問題点と改善策を解析・考察

解析・考察する課題

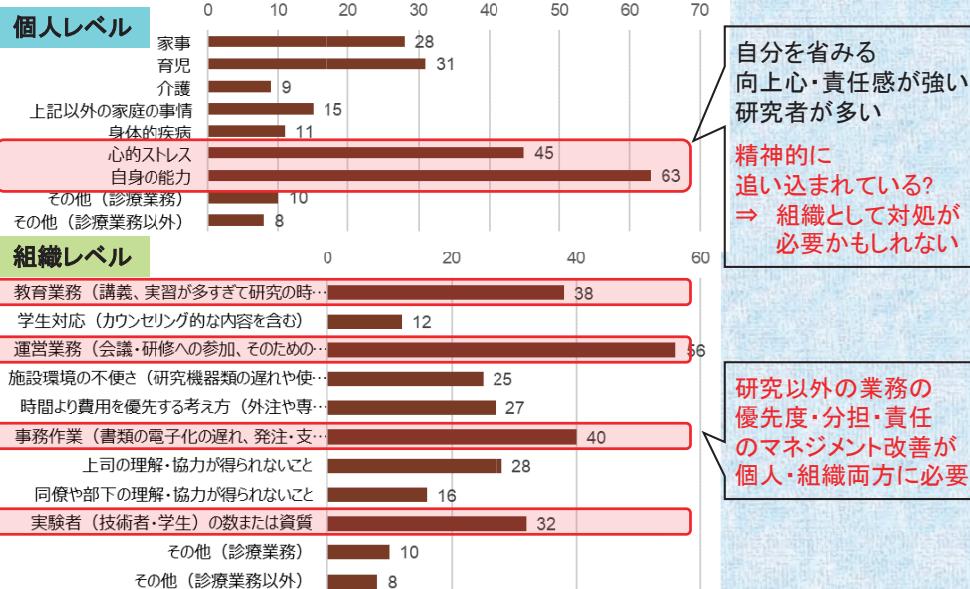
1. 研究時間の確保・効率化・生産性の向上で障害となる点
2. 研究と教育の両方の取組みの効率化
3. 効率や生産性を追求しすぎると生じる教育特有の難しさ
4. 研究の人的サポート体制の充実化
5. 研究の環境サポート体制の充実化
6. 家庭生活が及ぼす男女の研究時間・効率・生産性の違い

アンケート回答者の基本情報

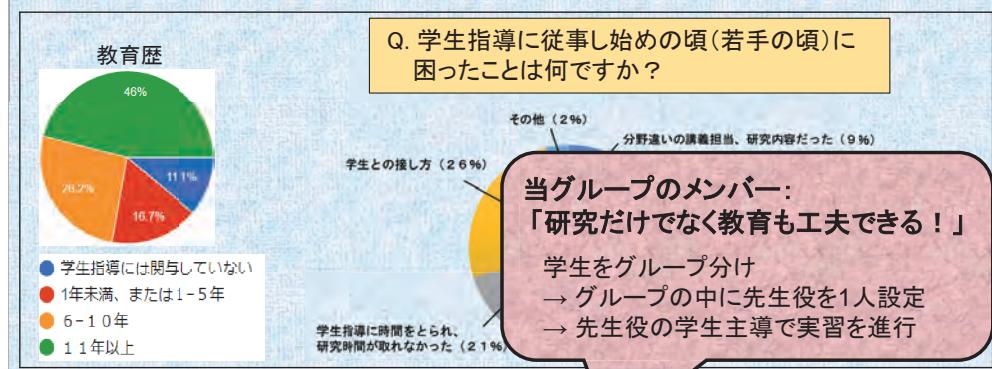


1. 研究時間の確保・効率化・生産性の向上で問題は?

Q. 研究時間の確保(あるいは研究の効率化・生産性向上)を妨げていると思う要因は何ですか?(上:個人レベル[2つ選択]、下:組織レベル[3つ選択])



2. 研究と教育の両方の取組みをどう効率化するか?



3. 研究の効率性や生産性を追求しすぎると教育特有の難しさが出てくるのでは?

教育そのものの難しさ

- ✓ 教育成果は昇進の評価対象としての重みが低い
- ✓ 学生の就職というインセンティブは特に基礎では極めてまれ
- ✓ 興味を持ってもらえるのはとても嬉しい
- ✓ 教員になるための教育を受けていない

効率性/生産性との相性の悪さ

- ✓ 学生の研究が終わるまで教員が立ち会う(終了時間により時間外となる)
- ✓ 学生への対応次第で、学生が興味を持って自分からどんどん勉強するようになる

学問の理想

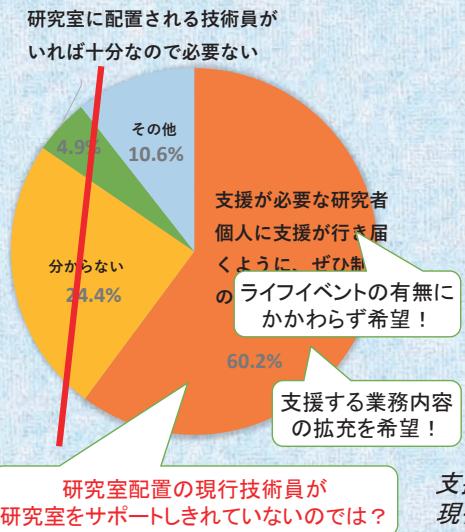
効率追求とは別に時間を割く必要もある

学生と教員が向き合う機会と時間を確保するのが重要!

⇒ 教育のインセンティブの上昇、教育メインの教員の用意、他の業務を事務・サポートスタッフが担当するなど

4. 研究者個人の支援員、共通施設の専任管理員の制度を充実させると、研究の効率と生産性が大きく上がるのでは？

Q. 研究個人者に配置される研究支援員制度は必要だと思いますか？



研究支援員配置制度：しあわせキャリアセンターが実施するライフイベントを抱える研究者に対して研究支援員を配置する制度。研究者個人に配置されるという点で、現行の各教室に配置される技術員・テクニカルスタッフとは異なる。

技術員と共に高度機器専任管理者を充実させて研究者をバックアップしているOISTは質の高い論文数で世界トップ10入り！質の高い科学論文の割合が高い研究機関ランキング 2018 ※総発表論文数で補正

順位	研究機関名	国
1	ゴールド・スプリング・バー・バー研究所	アメリカ
2	ワイルマン科学研究所	イスラエル
3	オーストリア科学技術研究所	オーストリア
4	ブリストン高等研究所	アメリカ
5	ブランディス大学	アメリカ
6	ロックフェラー大学	アメリカ
7	ジャワルラル・ホール先端科学研究所	インド
8	スイス連邦工科大学ローザンヌ校	スイス
9	沖縄科学技術大学院大学（OIST）	日本
10	プリンストン大学	アメリカ

支援員制度・共通機器専任管理者制度の充実化、現行技術員制度の見直しが研究の生産性へ貢献？

5. 職場・環境の効率的なシステムは研究の効率・生産性の向上に貢献するのでは？

研究環境システムで生じる効率性の違いの例：共通施設の利用

	利用可能者	利用申請書	時間外利用申請書	時間外利用条件	施設への入り方	各機器の管理	トラブル対処	前例の無い利用法
日医大 大学院共通施設A	学内	初回、年度ごと	初回、年度ごと	1年以内の使用記録	守衛さんの鍵 - 毎回	一般管理者、使用者のサポート無し	管理者を通して	できる限り止めて欲しい
日医大 病院開運共通施設B	学内の臨床医学系研究者	初回、年間	初回、年間	利用者の認証度	守衛さんの鍵 - 每回	一般管理者、使用者のサポート無し	管理者を通して	できる限り利用は柔軟
C大研究所 共通施設の1つ	学内、学外	初回、変更時	なし	なし	守衛さんの鍵 - 每回 ※状況により数日間可	直接機器業者に連絡して、後で管理者に連絡可能	できる限り考慮	
C大研究所 共通施設の1つ	学内、学外	初回、変更時	学内：なし 学外：時間外使用不可	学内：なし 学外：時間外使用不可	機器管理者が持機、※不在時は守衛さんの鍵	託運管理者、使用者のサポートも行う（有料）	託運管理者が対処	できる限り考慮
D大理学部 共通施設の1つ	学内、学外の共同研究者	初回、変更時	なし	なし	電子錠（登録者に付与）	一般管理者、使用者のサポート無し	管理者を通して、ただし状況次第で直接機器業者に連絡可能	できる限り考慮

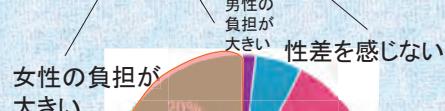
※これらは2022年6月現在の情報

- ・共通施設をスムーズに利用できるようにすると、効率・生産性は上がりそう！
- ・大きな成果のために、小さなルールや細かい手続きは省く、新しい利用案を試す！

6. 家庭生活での実態が男女の研究の時間や効率・生産性の違いに影響しているか？

Q. 家庭内の家事・育児の負担に性差を感じることがありますか？

役割分担をしているが

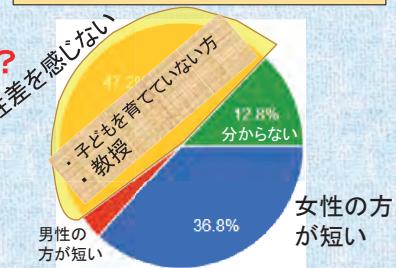


役割分担はあいまいで

家庭業務の実態は女性の負担が大きい。

なぜ？

Q. 男女で研究時間の長さに性差を感じことがありますか？



分担が公平でないのでは？

一 性的役割分担意識や社会的プレッシャーの影響？

問題はもっと複雑？以下は同等では？

- ・家事・子育て ⇒ 研究時間が短い ⇒ 研究室運営までできない
- ・大学・研究室運営 ⇒ 研究時間が短い ⇒ 家庭のことまでできない

結論・提案

研究の効率と生産性を上げるために

【研究者の努力】

- ・自分を省みすぎる・心的ストレスを抱えすぎる → 組織・第三者機関に相談
- ・教育 >>> 研究の状況 → 教育の工夫（先行事例の共有など）

【組織にお願い】

- ・研究者が精神的に追い込まれている → 組織的なケア・ハラスメント防止
- ・人的・環境サポートが困難 → 技術員・支援員・管理員・共通施設の体制の充実

【研究者と組織の協力】

- ・研究以外の業務が多すぎる → 業務の優先度・分担・責任の見直し
- ・学生と教員が向き合う機会と時間が持てない → 教育へもつと重点と集中

【社会全体への提案】

- ・社会の意識やプレッシャーの下で仕事と家庭で担う業務が男女で異なる ⇒ 全ての面で男女平等・男女協力の社会を実現するために議論

補足

研究時間に「男女差を感じない（性差ではなく個人の差）」の回答者は
58.9%が男性（このうち、17%は配偶者無し、35%は子ども無し）
41.1%が女性（このうち、43%は配偶者無し、52%は子ども無し） ←偏りある

年齢層は表のとおり。

	男性	女性
30歳未満	3%	9%
30代	33%	39%
40代	21%	26%
50代	15%	22%
60代以上	27%	4%

男性の50代以上には教授が多く、大学運営業務に時間を割かれて研究時間の確保が難しいと感じている人がいる可能性が大きい。

ちなみに、「女性が短い」の回答者は
46.5%が男性（このうち、13%は配偶者無し、13%は子ども無し）
53.5%が女性（このうち、30%は配偶者無し、30%は子ども無し）

2022年度 第3回 女性・若手キャリアデザインプロジェクト研究報告

グループ 4 『コロナ禍のキャリアアップの進め方』

稻垣恭子¹ 小峰壮史² 井上由貴³ 倉岡睦季⁴ 佐々木和馬⁵ 長田康孝⁶

日本医科大学大学院 医学系研究科 内分泌代謝・腎臓内科学分野¹

日本獣医生命科学大学 獣医学部 水族医学研究室²

日本医科大学 皮膚粘膜病態学³

日本獣医生命科学大学 応用生命科学部動物科学科 実験動物学教室⁴

日本医科大学 救急医学教室⁵

アンファー株式会社 研究開発本部⁶

背景

- 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は我々の生活、職場、研究環境に大きな影響を及ぼしている。
- 制約は個々によって異なり、対応も異なる。
- コロナ禍で受けた制約を分析し、コロナ禍の現状とコロナ禍後のキャリアアップに必要な要素を検討した。

1. コロナ禍の研究環境

- コロナ禍の家庭、育児の環境
- コロナ禍で増えた負担と現状の対応
- コロナ禍でキャリアアップをするための工夫
- コロナ禍で研究業績を伸ばすためにお勧めのツール

▶ 対象

日本医科大学 常勤の教員（助教以上）980名、

大学院博士課程学生 237名、

大学院研究生・特別研究生（ポスドク含む） 1177名

日本獣医生命科学大学 事務を介して同様の対象（研究者）

アンファー株式会社 グループメンバーを介し依頼。

▶ 方法

任意参加によるアンケートの依頼をメールにて行い、Google formにてアンケートへお答えいただくよう依頼した。

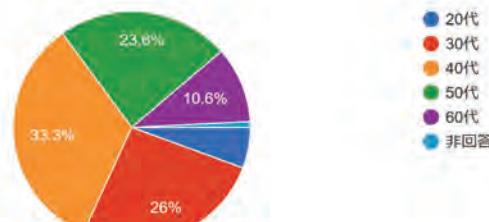
アンケート期間 6月23日から6月29日

第6波と第7波の間

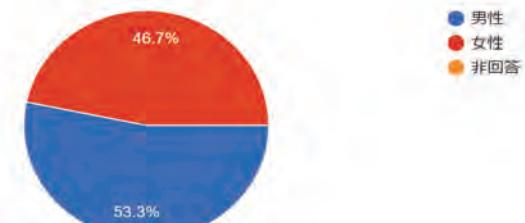
チャートを見る日本の感染状況 新型コロナウイルス：日本経済新聞 ([nikkei.com](https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/coronavirus-japan-chart/))
<https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/coronavirus-japan-chart/>



年齢
123件の回答

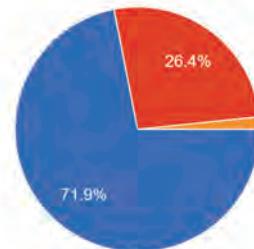


性別
122件の回答



所属

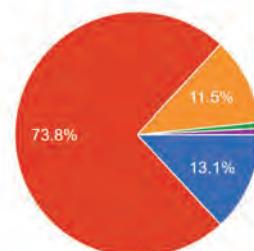
121件の回答



- 日本医科大学
- 日本歯科生命科学大学
- アンファー株式会社

仕事内容

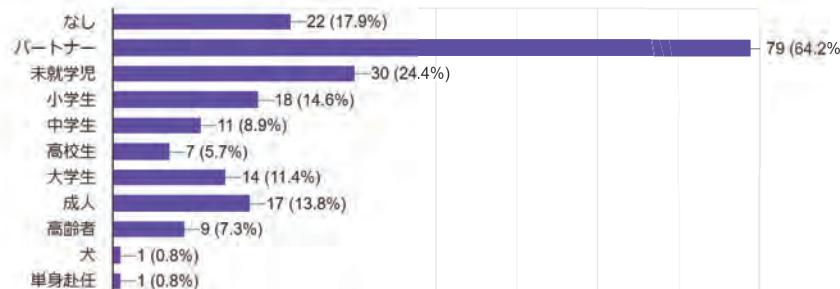
122件の回答



- 主に研究に従事（企業研究職を含む）
- 臨床・研究・教育の2つ以上
- 臨床に従事
- 営業、企画、開発、事務に従事
- 研究、教育、大学運営

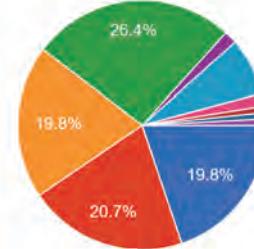
同居家族（複数選択可）

123件の回答



職位

121件の回答



- 教授
- 准教授
- 講師
- 助教
- ポストドクター
- 大学院生
- 企業研究職
- 技術員

1. コロナ禍の研究環境

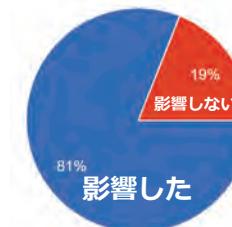
(時間・空間・人的制約、学会、留学の制約)

本稿の目的：

アンケート調査に基き、コロナ禍における研究活動の実態を把握する。

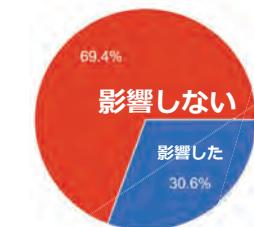
結果：

Q.コロナ禍の制限は、研究・仕事の進捗に影響したか



(男性：87.9%、女性：60.6%)

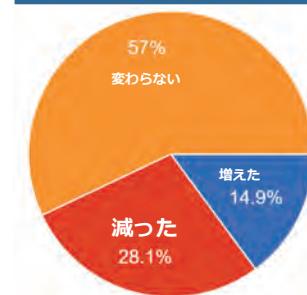
Q.コロナ禍の制限は、キャリア形成に影響したか



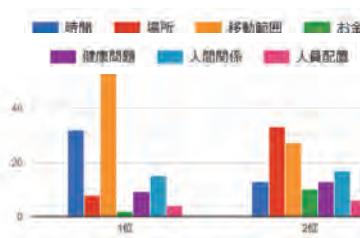
(男女ともに約30%)

1-①時間・空間・人的制約

Q.コロナ前と比較して、研究時間はどう変化したか



Q.コロナ禍において影響を受けたと考えられることは何か（1～3位を回答）



「移動制限により生活範囲が狭くなり、移動にかかる費用が減った」

「余計な飲み会がないので、楽になりました。自分としては、良い影響が多いです」

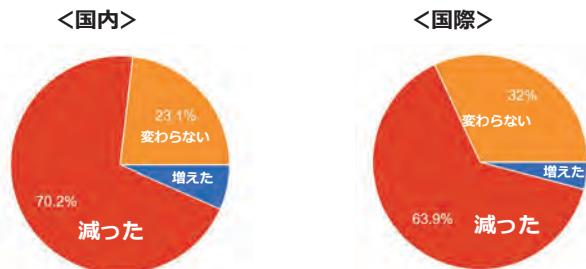
「コロナ関連の職務依頼が増え、仕事の絶対量が増加した」

「実験するにも協力者を募ることが出来ない、時間的施設的制約」

「オンラインの会議や勉強会が増え、仕事がどんどん生活に入り込むため、生活の時間との区切りが難しくなった」

1-②学会

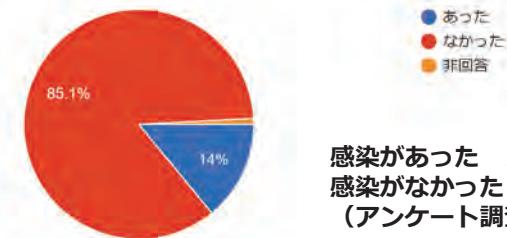
Q. 学会（会議）への参加は変化したか



「国際学会には参加しやすくなり、オンラインで聴講できるメリットは大きい」
「現地での拘束時間や交通費などの負担が減った」
「他学の先生と直接ディスカッションする機会が減った」
「他機関の研究者との交流がなくなった」
「学会等で人の話を聞くことで得られる研究のヒントを得る機会の減少」
「医療機器の展示等、実際に触れる機会が減った」

コロナ禍の家庭、育児の環境

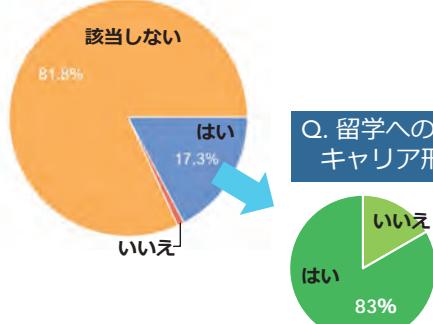
家庭内でコロナ感染（濃厚接触含む）がありましたか。
121件の回答



感染があつた 14%
感染がなかつた 85.1%
(アンケート調査は2022年6月実施)

1-③留学

Q. コロナが留学の障壁となったか

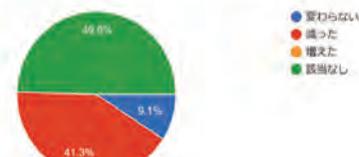


Q. 留学への障壁は、その後のキャリア形成に影響を与えたか



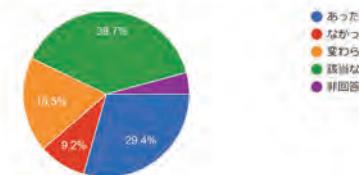
「面接の機会を逃した」
「留学を断念した」
「留学や海外の学会に行きたいという気持ちがかなり減少した」
「海外への展開が遠のいた」
「帰国できなくなった」

お子様の保育園や幼稚園、小学校、中学校への通学日数は変化がありましたか。
121件の回答



【該当あり】のうち
減った 8.2%
変わらない 18%

コロナ禍において、家族の介護、高齢者の対応などに制約はありましたか。
119件の回答



制約があつた 29.4%
制約がなかつた 27.7%

コロナ禍での生活、家庭環境の変化

具体的な変化や対応

- ・ 買い物：ネットスーパー（64%）、友人や職場の人などに依頼（18%）
その他（自家用車で郊外の空いているお店を利用した、備蓄食材の利用）
ネットスーパーの利用可能エリアや世代によるインターネットの利用格差によって急な自粛生活への対応に大きく差がある。地域や世代を問わず必要な生活用品入手できるサービスが求められる。

- ・ 育児：通学・通園日数が減った（82%）
→対応 在宅勤務への変更（16%）有給休暇の取得（14%）
家族、パートナーに頼る（11%）シッターの依頼（6%）、時短勤務（4%）、休業（2%）
4人に一人が勤務体制の変化が必要であった。職場の理解、給与や社会制度の保障が求められる
- ・ 高齢家族との関わり：制約など変化があった（29.4）
→具体的な内容 面会、帰省の制限（22%）、買い物代行や介護サービスの制限による介護の負担増加（6%）
介護サービスの利用制限による介護負担増への対応が求められる

コロナ禍で増えた負担と現状の対応

具体的な影響（回答数74）

- 仕事：業務量の増大（25.7%） 医療現場の負担、人員不足など
研究：制約の増大（14.9%） 研究時間の不足、施設使用・実地調査の制約、海外渡航の制約など
生活：在宅時間の増加（13.5%） 子どもの休園・休学に対する対応など
コミュニケーションの減少（23.0%） 孤独感・ストレスなど
健康：健康被害（12.2%） 外出自粛によるストレス・運動不足、医療受診の制約など

⇒ 遠隔システムの導入・利用の促進

- ポジティブ意見（6.8%） ・自由な時間が増えた ・仕事の幅が広がった など
ネガティブ意見（12.2%） ・遠隔対応に関する業務量の増大 など

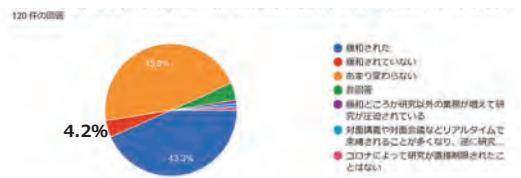
Online学会の参加（93.4%；121人中113人）

参加に関する意見（回答数48）

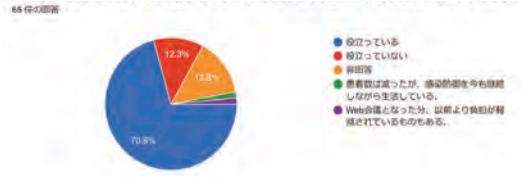
- ポジティブ意見（41.7%） ・参加しやすい ・移動なく効率的 など
ネガティブ意見（31.3%） ・人的交流が少ない ・質問しにくい など
両意見（12.5%）

2022年度における状況の変化

2020-2021年度（外出自粛時）と比較して研究の制限は？



コロナ禍での工夫は役立っているか？



緩和された
変わらない
制限が増えた

役立っている
役立っていない

今後求められる対応は？

自由記述の抜粋

- ・会議はできるだけオンラインかメール開催にして職務負担を軽減してほしい。
- ・コロナ禍で構築された、テレワーク、遠隔会議、オンライン授業などが廃止されていく方向に懸念する
- ⇒ 遠隔システムの有効性が受け入れられている。
- ・コロナ禍が収まったことで、大学運営に係る業務量が以前のように（以前よりも）増加しており、研究に充てる時間が確保できない。加えて講義が対面と遠隔のハイブリッドになるなど、コロナ前よりも実質の業務量は増加している。
- ⇒ 対面業務の再開と共に、2022年度はハイブリッド化の移行期として業務量が増加している。

対面と遠隔のハイブリッド化をいかに負担少なく、有効なシステムとして構築するか？早急に取り組むべき課題である。

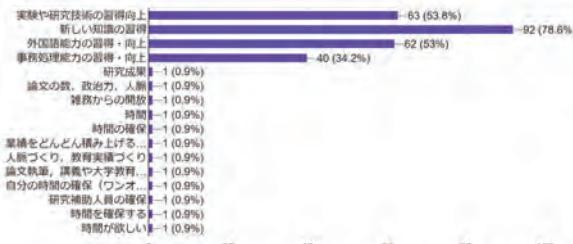
コロナ禍におけるキャリアアップの工夫

Q.自身のキャリアアップに必要なことは? (回答数 117)

「実験技術の向上」	53.8 %
「新しい知識の習得」	78.8 %
「外国語能力の習得・向上」	53 %
「事務処理能力の習得・向上」	34.2 %
「自分時間の確保」	5.4 %

研究技術、言語、PC業務の事務処理能力などスキルの向上
自身の時間を確保することが必要とされた

ご自身のキャリアアップのために、必要なことはど...てはまるものを選んでください。 (複数回答可)
117 件の回答



コロナ禍におけるキャリアアップの工夫

Q.「コロナ禍において、ご自身のキャリアアップのために
新しく行ったことはありますか。」(回答数 37)

- ・オンライン英会話
 - ・オンライン講義、オンライン講習会への積極的な参加
 - ・動画編集・配信の技術の向上
- など

オンラインを利用した、
他者とのコミュニケーションや講義講演による知識の習得など

→ フィジカルディスタンスを保ちつつ、
日常生活の限られた時間のなかで、
自分時間で利用できる、などのメリットがあった

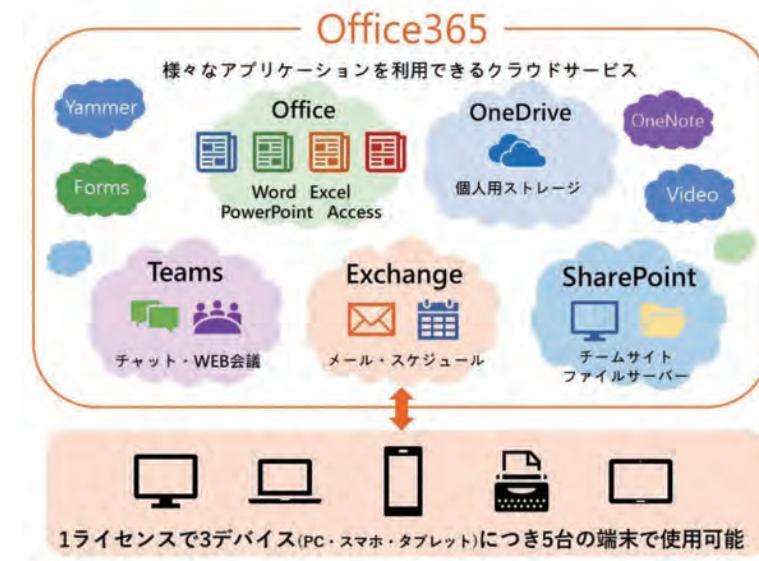
5. コロナ禍で研究業績を伸ばすためにお勧めのツール

◎コロナにより明らかに変化したのはオンラインツールの普及である。



容易、かつスピーディーにコミュニケーションが取れ、
一日の業務効率は格段にアップ。

さらに、これまで長距離移動が必要であった
国際学会への参加も気軽に参加が可能となった。



アンファー株式会社では、Microsoft365を活用することで、
全社員がデータをShareすることができ、データ管理が非常にクリアとなり、
どんな情報も円滑に共有することできるようになった。

結語

今回の検討でコロナ禍が与えている負担と対応策が明らかとなつた。

- ▶ 個人が被る負担が明らかとなり、継続した研究や職場維持には、対策が必要であること。
- ▶ オンラインの広がりによる利点と欠点
→オンライン可能になることにより、業務時間拡張、回数の増加が効率悪化につながるとの報告もある。
- ▶ コロナ禍への個人の対応、反応による負担の違い
- ▶ デジタルツールに関する理解と活用の重要性

貴重なご意見

以前に比べて研究への負担が緩和されていない場合、どのような工夫が必要か(職場、社会への要望を含む)

- ▶ フィールドワークは多少行きやすくなつたが、まだ「緩和された」とは言い難い。育児、介護など家族のケアをする場合、社会的にwithコロナの雰囲気が醸成されても必ずしもそれにすぐはじめない。**条件付きでもいいので在宅勤務の仕組みを整えるなどの対策**が必要と考えます。
- ▶ コロナ禍が収まつたことで、**大学運営に係る業務量が以前のように(以前よりも)増加しており、研究に充てる時間が確保できない**。加えて講義が対面と遠隔のハイブリッドになるなど、コロナ前よりも実質の業務量は増加している。だからといって、どうにか改善できる話でもない。**大学運営に関わらない方がキャリアアップには良い**ということが再確認できただけ。
- ▶ 2020年からの2年間の**コロナ対応**がいかに大変なものであったか、もっと積極的にアピールする必要がある。**会議はできるだけオンラインかメール開催にして職務負担を軽減してほしい**。
- ▶ 残念ながら**日本医科大学は医師にとって働きにくい環境**です。意味のない規制や仕事が多すぎますし、それに見合う報酬もありません。増収益、借金返済などに喜んでいるようですが、働く人にとって魅力的でなければ有能な人材から逃げていく、という事実をよく考えた方が良いです。
- ▶ **コロナ禍で構築された、テレワーク、遠隔会議、オンライン授業などが廃止されていく方向に懸念する**。

努力を正当に評価してほしい

上記の意見はコロナ禍で多くの負担を担い、従事した方々の貴重なご意見であり、個々の幸福度が増す環境が、コロナ禍を契機に構築されることを希望する。